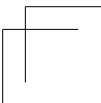
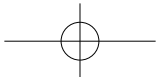
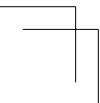
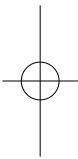
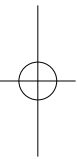
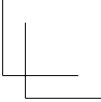
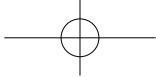
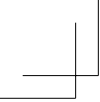


目次

極悪専用	5
六〇三号室	51
日曜日は戦争	91
つかのまの……	135
闇の術師	173
最凶のお嬢様	209
黒変	241
二〇一号室	283
元日の来訪者	317
緊急避難通路	347

極悪専用

装丁 多田和博



極悪専用

西麻布のクラブをでたとき、俺は御機嫌だった。

その日のクラブは、週末のイベントナイトでもないのに、妙に混んでいた。一年のうち何回か、こんな日があるもんだ。なぜだか知らないが、皆んな妙に浮わついちまっていて、いいことがあるんじゃないかって盛り場にてくるのさ。それで飲み屋だのクラブをのぞくと、やっぱり人がいっぱいいて、これは何だかおもしろいことになるんじゃないのと期待が盛り上がる。

そういうノリってのは、伝染しやすいところがあって、かるーく、クサカバツでもやったみたいに全員が、いい感じになるんだ。

会社が低空飛行でヤケ気味のキャビンアテンダントを二人、読者モデルとかふかしてる女子大生ひとり、それにこいつはとりあえずのキープ素材で、店いきたくないとかだ巻いてたキャバ嬢をひとり、クラブでゲットした。即おもち帰り可能だったのは、キャビンアテンダントのお姐さんがただが、俺にはビジネスの予定があつて、夜中に時間ができたら合流する約束をした。

ビジネスというのは、知り合いの中国人留学生が国からもって帰ってきたバツを千錠ほど、別のクラブでセキユリテイをやつてるナイジェリア人につないでやることだった。バツは、M D M A って合成麻薬の錠剤だ。俺の勤じゃ、留学生が密輸した千錠のうち、三分の一から半分は、イミテーション、ただの砂糖のかたまりだ。でなけりゃ、一錠百円なんて、とんでもなく安い値段で卸すわけがない。もつとも最初は三百円とかいってたのを、知り合いのやくぎにぶち殺させる^{おど}と威して値切ったのだけだな。

十万渡して千錠ふんだくったが、こんな代物をいつまでも手もとにおいておくほどバカじゃないから、

「イイ金儲ケナイ？」

としょっちゅう訊いてくるアホナイジェリア人に五十万で売り飛ばすことにした。そいつの知り合いにイラン人がいて、そこそこの値で買ってやるといっているらしい。

コインパークに止めてあったボルシェに乗りこむと、俺は携帯を開いた。ナイジェリア人との約束まであと十分だ。そいつがいるクラブは六本木だから、五、六分もあれば店の前まで乗りつけられる。その場でキャッシュとバツを交換すりゃ、即四十万の儲けだ。

携帯が鳴った。番号を見て舌打ちした。このボルシェの持ち主、メイからだ。盛りを過ぎたA V女優なんだが、ボルシェを買ってくれたババの会社がヤバいことになってるんで返してくれつつうるさい。そんなの知ったことじゃないっての。鍵をよこしたお前がアホなんだ。

留守電に切りかわるのを待って、俺はナイジェリア人の携帯を呼びだした。

「ハイハイ」

「今からそっち向かう。金用意して待ってるよ」

「ハイハイ、オッケーヨ」

エンジンをかけてパーキングをでた。タクシートの空車をかわし、田舎者のタルメルセデスにパッシングをくらわして、一気に六本木の交差点まで駆けあがる。そこから先は空車渋滞でちよつと時間がかかった。飯倉片町の交差点の少し手前に、ナイジェリア人がいるクラブはある。

ドンキの前は、そいつらの仲間がやたらたまっている、うつとおしいたらない。外国人の多いクラブは、大使館関係のワルガキの巣窟で、これが俺もあきれるほどタチが悪いんだ。やりた^いい女にはクスリを盛るわ、親の肩書きであちこち飲み食いして料金は踏み倒すわ、ヤバくなったら、パパに泣きついて本国にとんずらすわ。

メイとも、そいつらにクスリを盛られて輸^{おわ}送^わされそうになったのを助けてやったのが縁で知りあった。そのときのことを恨んでいるらしい、大使の馬鹿息子がいるとかで、最近俺は六本木に近づいてなかった。

クラブの前で車を止めると、約束したハッサンの姿が見えた。年のわりに老け顔で、ハッサンじゃなくてオッサンだろうって、俺はいつもからかっている。

窓をおろし、

「おーい、オッサン」

と、俺は呼んだ。「SECURITY」とプリントされた黒いTシャツを着たハッサンが、店の入口の前で手を振る。

バカじゃねえのか。手を振るくらいなら、さっさとこいっての。

だがハッサンは動かない。俺は舌打ちしてハザードを点け、ポルシェを降りた。千錠のブツは、ロボットの形をしたm&mのチョコレートボックスに入れて、助手席にころがしてある。ハッサンに近づき、首を傾けた。

「こっちこいつて」

だがハッサンは動かない。白い歯をむきだして、ただにたにた笑ってるだけだ。

「オッサン！」

半分キレて、俺は怒鳴った。そのとき、妙な連中に囲まれていることに気づいた。ガタイがよくて、喪服みたいなスーツを着た男四人だ。歩道に散らばっていたそいつらが、突然俺をとり囲んだんだ。

マッポか。一瞬、緊張した。マッポなら別にどうってことはない。MDMAを見つけられても知らない、ポルシェに初めからあったってとぼけてやる。なにせ名義は、メイのパパだから、どうってことはない。国会議員の息子だか甥っ子らしいから、うまくもみ消すだろう。

「望月拓馬だな」

喪服その一がいった。俺は初めてそいつに気づいたフリをした。

「誰ですか」

そのとき、俺のポルシェの前にぴたつとメルセデスが止まった。さっきバッシングをくわわしたS600だ。

「話がある。つきあってくれ」

その一は俺の腕をつかんだ。

「忙しいんです。今度、今度にして下さい」

俺はその手をふり払った。サツじゃない。そして、

「ちよつと、ちよつと！」

と怒鳴った。メルセデスから降りてきた別の喪服野郎が、勝手にポルシェのドアを開け、チョコレートボックスをもちだしたからだ。

「四の五のいわずにこい。さもないとここでぶつ殺す」

いきなり背骨を固いもので突つかれた。喪服その二が、俺の背中にびったり寄り添っている。やくざ者か。たかがバツくらいでやけにおおげさだが、ここはしかたがない。こいつらあとで痛い思いをするだろうが、道で騒いでお巡りでもきたら厄介なので、俺はいう通りにすることにした。

「どこいくの」

「あの車に乗れ」

その一がメルセデスを示した。俺はため息を吐いた。

「俺の車は？ このままじゃもってかれちまうよ」

「心配するな。こっちでやつとく」

「あ、国会議員の倅のだから、傷とかつけないでね。あとがうるさいから」

その一と二があきれたように顔を見合わせた。

「口の減らねえガキだ」

押されるまま、メルセデスの後部席に乗りこんだ。ハッサンをふり返る。あの野郎、あとでボ

コる。ひとりじゃ無理だろうから、仲間集めてポコリに行く。俺を乗せ、メルセデスは発進した。

「どこいくの？ あんたらの事務所？」

うしろに三人は、いくらS600でも狭い。誰も返事をしなかった。

俺はちょっと不安になった。

「あのさ、いいけど俺のこと、知ってる？」

「うるさう」

いきなりその二が裏拳で俺の口を叩いた。唇が歯にあたって切れ、俺は声をあげた。

「痛てっ。何すんだよ」

「黙ってろ」

俺は口もとをおさえた。こいつら絶対許さねえ。指詰めさせてやる。

メルセデスは東京タワーの方角に向かって走った。事務所にしちや遠い。地回りが縄張りを荒されて怒るなら、一番近い事務所に連れていく筈だ。

芝公園のかたわらを過ぎ、増上寺の向かいにあるビルの地下駐車場に入った。組事務所に連れていかれるものだと思っていたが、看板も何もでていない、ふつうのビルだ。

「降りろ」

俺は逆らわないことにした。また殴られても嫌だし、あとでこいつらをギャフンといわせるには、今はいく通りしておくほうがいい。

エレベータでビルの八階にあがった。廊下を歩き、つきあたりの観音開きの扉の前に立つ。代

紋も何も掲げられていない。小さな会社の社長室という感じだ。

その一がノックをした。

「どうぞ」

声が出た。扉が中から開かれた。グレイのスーツを着て、髪を七・三に分けた、もろり、マンみたいな男が立っている。その向こうに大きなデスクがあって、タキシード姿のおっさんがすわっていた。パーティの帰りなのか、バタフライをゆるめてドレスシャツの片方の襟からたらししている。六十くらいで、顔が少し赤い。

「きたか」

おっさんがいって、銀色のシガレットケースをデスクの上からとりあげた。中からだした煙草をとんとんとシガレットケースに打ちつける。くわえると、七・三男がさつとにじり寄って火をつけた。

煙を吐き、おっさんはじつと俺を見つめた。黒目が大きくて迫力がある。やくざというより、やり手の金貸しみたいだ。

「落ちついてるな」

俺をにらみつけていたが、いった。俺はその一をふりかえった。

「喋っていらるか」

その一は俺のかたわらで、うしろに手を組んだまま頷いた。

俺はおっさんに目を戻した。

「あんたが誰かは知らないけど、今夜のこれは、すげえマズったと思うよ」

おっさんの表情はかわらなかつた。じつと俺をにらんだまま、間をおいて、
「なぜだ」
と訊ねた。

「俺をさらって、怪我させた」

「そのどこがマズい？」

ちよつと嫌な予感がした。俺は息を吐いた。ここは妙な駆け引きはしないほうがよさそうだ。

「望月塔馬^{とうま}って知ってる？」

まさか知らないわけではない。この国でうしろ暗い商売をしていて、ちよつとでもキャリアがあれば、知らない筈がないのだ。

「俺の祖父^{じい}ちゃんなのだけど」

ふつうはぶつ飛ぶ。土下座して、申しわけありませんでしたってなもんだ。本当のところ、祖父^{じい}ちゃんがなんでそんなに恐がられているのか、俺にはよくわからない。でも政治家もやくざも、祖父^{じい}ちゃんには逆らえないようだ。

だが、おっさんの表情はかわらなかつた。

「それで？」

とிட்டただけだ。

別の喪服野郎が、ポルシェからもちだしたチョコレートボックスを、おっさんのデスクの前においた。おっさんはロボットの胸についたボタンを押した。デスクの上にはばらばらと、白やピンク、青の錠剤がころがった。それを無表情に見ている。

「あのう、知ってますよね。望月塔馬」

おっさんは目を上げた。まるで表情はかわってない。

「望月先生は、私の恩人だ」

ほつとして膝から力が抜けそうになった。何だよ、このクソオヤジ。びっくりしたじゃないか。

「じゃ、帰っていいすよね」

俺は口調をかえた。

「そうはいかん」

おっさんは首をふった。

「なんで」

俺が訊き返すと、おっさんは立ち上がった。デスクを回りこみ、俺に歩みよってくる。そして五十センチまで近づいたところで止まった。

「望月先生は困っておられる。お前のようなクソガキが、世間のルールを無視してあちこちで人に迷惑をかけても、先生の孫ということで大目に見られている。先生はまったく望んでいないのに、だ」

「説教、すか」

俺はおっさんをにらんだ。だったらさっさとすませてくれ、だ。さっきのキャビンアテンダントが待ってる。

「鼻柱が強いのは、先生のうしろ楯があるからか。それとも世の中をまったくわかっていない馬鹿だからか」

「あなたに関係ないだろう。確かに俺はワルガキかもしれないが、この世界がまともじゃないって、俺に教えたのは祖父ちゃんだ」

「先生が。どう、教えた？」

「世の中は見かけ通りじゃない。政治家も役人も、皆んな手前の権力やカネのために生きてる。弱みを握られりゃ利用されるか蹴落とされるかだ。教わったわけじゃないけど、ガキの頃から祖父ちゃんを見てたらわかる。テレビでは威張りくさってる政治家がもみ手をしてすり寄ってくるのだから」

「では、そいつらに先生が何をしてやっているかを知っているか」

「そんなの知るわけない。土下座したり、米つきバッタみたいにべこべこしてるのを見ただけさ」

おっさんはあきれたように首をふった。

「たったそれだけでお前は世の中がわかったというのか。健康で何ひとつ体に不自由のない男が、定職にも就かず、クスリをやって、次から次に女に手をだし、裏稼業でも最も蔑まれるようなこきたない銭儲けをする、その理由が、ただそれだけのことか」

「あなたには関係ねえだろう！」

さすがに俺はキレた。おっさんは顔色ひとつかえず、

「おら」

と右手をのばした。七・三男が歩みよると、スーツの下からとりだしたものをのせた。拳銃だった。俺は体が固まった。

おっさんは感触を確かめるように、拳銃を何度か握り直した。

「先生はいわれた。お前が、本当にクズなのか、確かめてほしい。自分の前では、いい子ぶっているし、孫だという甘い気持ちもあって目が曇る。そして、クズだとわかったら、ためらうことはない。殺して捨ててくれ、と」

「嘘だ」

俺の声は震えていた。

「嘘ではない。私は約束した。先生に大恩ある身だ。殺すときは、この私が自らの手でやる、と」

「冗談じゃねえよ。そんなことで殺されてたまるかよ」

銃口が額に押しつけられた。冷たい鉄の塊に触れ、俺の顔は凍った。冷気は顔から首、首から胸、胸から腹へと伝わっていく。動くことはおろか、口をきくこともできなくなった。

おっさんの目には何の迷いもない。

「覚悟はいいか」

俺は小さく首をふるることしかできなかった。悲しくもないのに涙がでてきた。

「目をつぶれ」

意地だった。つぶつてたまるか、だ。俺は逆に思いきりみひらいてやった。涙がぼたぼたと落ちる。

「先生の孫だ。失われた先生の気持を思うと、いたたまれんな」
おっさんはつぶやいた。もう頭はまっ白で、何も考えられない。

不意に銃口が下げられた。

「先生には叱られるかもしれない。が、お前にチャンスやる」
何をいつてるんだ。助けてくれるってことか。おっさんは俺の目をのぞきこんだ。

「死にたくないか」

俺は頷いた。あたり前じゃないか。

おっさんは不意に視線をそらした。何かを考えているようだった。

やがてつぶやいた。

「白旗しろはたのところで助手の口があつたな」

そして七・三男を見た。

「連れていけ。白旗には俺から話をしておく」

「承知しました」

左右から腕をつかまれた。俺は全身が痺れていて、子供のようにもちあげられ体の向きをかえさせられた。

おっさんは俺をもちあげている男たちに行った。

「目隠しを忘れるな。それと暴れたり、逃げようとしたら殺せ。責任は俺がとる」

2

メルセデスの中で俺は吐いた。アイマスクをつけさせられたせいじゃない。車酔いも少しはあ

つたが、それ以上に恐ろしかったからだ。恐怖が吐きけをもよおさせるというのを、初めて知った。

車に乗せられる前、俺は財布と携帯、煙草やライターまでとりあげられた。

吐いたことでは、殺されも殴られもなかった。ただ用意されてたらしいビニール袋を顔に押しつけられただけだ。

「吐くなら、ここに吐け」

という喪服その一の声が耳もとでした。つまりこいつらの前で、恐怖で吐く人間は、俺が最初じゃないことだ。

四、五十分、たぶん一時間にならないくらい、車は走った。やがてどこかの建物の中に入り、止まった。建物の中とわかったのは、タイヤが床の上をすべるキュルキュルという音がしたからだ。

アイマスクがむしりとられた。

「降りろ」

俺はいわれるまま車を降りた。どこかの駐車場だった。いろんな車が並んでいる。やけに高級車が多い。メルセデスだけじゃなくフェラーリやランボルギーニもある。他にもハマーやキャディラック、クラシックカーみたいな外車も止まっていた。

やけに明るい駐車場だ。天井からやたらと照明がぶら下がっている。それに盗難防止用か、監視カメラが壁のあちこちにすえつけられていた。

「歩け」

駐車場を歩いた。「関係者専用」と書かれたステイルの扉があった。そのかたわらのカメラつきのインターホンをその一が押した。

カチツという音がして、扉の錠が外れた。扉を開くと、今度はやけに狭くて薄暗い通路がのびている。人ひとりがやつとの幅だから、俺は前後をはさまれて進んだ。

通路は途中で何度も直角に折れた。まるで遊園地の巨大迷路だ。一本道だから迷うことはないだろうが、なんでこんな造りになっているのか不思議だった。

通路の途中に、また扉があった。その中は、コンクリートがむきだしの小部屋で、壁ぎわに小さな木製の机と椅子がおかれている。大昔の勉強机のように粗末な机と椅子だ。そこに男がひとりすわっていた。灰色の作業衣のような服を着け、机に向かって何か書きものをしている。

まるでゴリラのような体つきだ。上半身が異様にでかく、まくった袖からのぞいた腕は太くて毛むくじゃらだった。

「連絡がいつている筈だ。連れてきた」

その一がいつても、ゴリラは書きものをやめなかった。背中を向けたまま、手を動かしている。コリコリ、という音が聞こえた。それくらい静かだった。

俺は、喪服野郎たちが妙に緊張していることに気づいた。

部屋の扉と、ゴリラがすわる机まで四、五メートルは離れている。だが扉を抜けた場所から、喪服野郎たちは、ほとんど足を踏みだそうとしない。

「ほいへへ」

ゴリラが向こうをむいたままいった。おいてけ、といったようだと言は俺は気づいた。

「わかった。あとは任せる。詳細は聞いているだろうから何もいわん」

ゴリラは左手を掲げ、肩ごしにふった。喪服野郎たちが部屋をでていった。俺はその場にとり

残された。

扉が閉まっても書きものは終わらなかった。俺はどうしていいかわからず、ただつつ立っていた。本当はすわりたかったが、そうしなかったのは、喪服野郎たちが、このゴリラを恐がっていたように感じたからだ。もしかすると、めちゃくちゃ凶暴な男で、少しでも気に入らないことがあると相手の腕とかを引っこ抜くような怪物かもしれない。

書きものが終わった。ゴリラが鉛筆をおき、広げていたノートを閉じた。肩ごしに見えたその頁には、細かい字がぎっしりと並んでいた。

椅子を引く。コンクリートと椅子の足がこすれる、キイイという音がした。

立ちあがったゴリラがこちらを向いた。眉毛が一本もなかった。小さな目が瞬きもせず、俺を見すえた。

両頬にすごい傷跡があった。唇をはさんで、横一文字に左右を走っている。口をま横に裂かれたようだ。その傷のせいで、口がきちんと閉じられず、息の抜けた喋りかたになるのだ、と俺は気づいた。

「お前が誰だかは知らん。俺にはどうでもいい」

ゴリラはいった。実際は、ほまへかられらかはしらん、ほへにふあろうれもひひ、と聞こえた。

「ほへのひうこほかわかふか」

俺は無言で頷いた。どうしてかはわからないが、何をいつているのか、俺には理解できた。

「珍し」

ゴリラは小さな目で俺を見つめた。

「ふつうの奴は、俺の言葉がわからない。それともわかったふりをしているのか？」
「わかります、本当に」

俺は答えた。ここは、祖父ちゃんといるときのように、いい子でいるに限ると勤が告げていた。
「そうか」

ゴリラは頷くと、身をかがめた。畳まれた灰色の服を足もからとり、俺にさしだした。

「これに着がえろ」

「今ですか」

返事はなかった。返事がないのが恐かった。

「はら」

俺はいつて、服を受けとった。ゴリラが着けているのと同じ作業衣だ。俺はその場でジーンズとジャケットを脱いだ。Tシャツにパンツになった俺を、ゴリラは無言のまま見つめている。

もしかしてこいつに犯されるのだろうか。考えただけで鳥肌がたった。

「細いな」

俺は答えなかった。

「飯を食ってるのか」

たぶんあんたよりいいものを食ってるよ、腹の中で思ったが、とりあえず、

「すいません」

と頭を下げた。

ゴリラの表情がかわった。

「なぜあやまる」

「いや、なんか細くて駄目みたいなんで」

「教えておく」

ゴリラがいつた。俺は作業衣に通しかけていた手を止め、ゴリラを見つめた。

「今日からお前は、ここでいろんな人間と会うだろう。声をかけられることは滅多にないだろうが、もしかけられたら、今のよう理由もなくあやまるんじゃない」

いつている意味がわからなかった。

「理由があつてあやまるならいい。理由もないのにあやまる奴は、本当にあやまらなきゃならんときも、誠意をもってあやまっているとは思われない」

「はら」

説教かよ。

ゴリラは満足したように頷いた。意外とちよろい。

俺は作業衣に着がえた。今まで着ていた服を、

「あの、これは？」

と訊いた。

「欲しいか」

「え？」

また返事はない。耳が悪いのか、訊き返されるのが嫌いなのか。

「あ、欲しいです。帰るときとかいるんで」

急いでいった。

ゴリラは顎から頬のあたりをなでた。ひきつれた一文字の傷跡をさわっていたが、「じゃ、もつてろ」

とだけいった。俺は頷き、馬鹿みたいに自分の服をかかえて立っていた。

ゴリラが足を踏みだした。

「25」

入ってきたのとはちがう扉が机のかたわらにあり、ゴリラはそこをくぐった。俺はついていった。いったいここがどこで、何をやる場所なのか、まるでわからない。

扉の奥は、鉄製の急な階段の踊り場だった。ゴリラは階段を昇った。太い両腕で手すりをつかみ、ひよいひよいと大きな体をもちあげる姿は、本物のゴリラのようだ。

階段は螺旋を描いていて、ひどく長かった。見上げるとずっと上までつづいていて、俺はめまがした。

高さにして二十メートルくらい登っただろうか。息が切れ、膝がわらいだした頃、急に階段は終わり、俺は横長の広い部屋の床に立っていた。

何十というモニターが長いほうの壁の左半分をおおっている。モニターにはいろいろな映像がうつっていた。テレビやパソコンの画像とはちがう。すべてどこかの建物の景色だ。そのうちのいくつかが、さつき車を降ろされた駐車場の映像であることに俺は気づいた。

モニターの前にキヤスター付の椅子があった。操作パネルが正面にある。

「すわれ」

ゴリラがその椅子を示した。俺は言葉にしたがった。

「ここが管理室だ」

椅子の背もたれをつかみ、ゴリラが耳もとでいった。くさい息だ。

「ここに写っているのは、駐車場とエントランス、それにゴミ置場の周囲の映像だ」

ゴリラの手が俺の肩ごしのびた。目の前にあるつまみをひねった。

モニターの映像が切りかわった。エレベーターらしき箱の中と、薄暗い廊下の景色になる。画面の右下に、「3」から「16」までの番号が浮かんでいた。

「これが各階の廊下。二階から十三階まで各四部屋、十四階と十五階は、各ふた部屋。合わせて五十二部屋が、この建物にはあって、今八部屋が空いている」

「マンションなんですか」

「そうだ」

不意に俺の体が横に流れた。ゴリラが椅子を右に押しやったのだ。軽々と床をすべって、俺は壁の右半分足もとまでガラス張りの窓の前まで移動した。天井からリモコンのような箱がコードで下がっている。

ガラス窓の下は、建物の入口のようだった。

表とつながった低い石段があり、その左手は、外の道路との境のようだ。石段をあがりきったところに銀色の大きな扉がある。今いる部屋は空中から建物の出入口を見おろすような造りなので、扉の内側にさらにもう一枚、ガラスの扉があるのがわかった。

「この下がエントランスだ。どんな人間がこのマンションを訪ねてきたか、自分の目でも確かめ

られる」

ゴリラが腕を組んで下を見おろしながらいった。

「防犯に気をつかっているんですね」

何かいわなきや、と思っただけだ。ゴリラはちらつと俺を見た。

「ここは住人以外、立入禁止だ。たとえ住人の親兄弟であっても、契約した人間以外は立入を許さない。住人はこのエントランスを使わない。つまりこの下を通るのは、基本的に招かれざる客だけだ」

「招かれざる客？」

ゴリラはモニターの壁と角を接した、左手の壁に歩みよった。ボタンを押すと、壁の模様だと思っていたのが、白い長方形のブラインドだったとわかった。回転し、外の景色が俺の目にとびこんだ。

正面に水銀灯の並んだ長い橋が横たわっていた。車がいきかっている。橋の下は、黒々とした川だ。川は今俺がいる建物の少し手前で蛇行していた。この建物は、大きな川沿いに建っているのだ。

ゴリラは橋の先をさした。

「あっちは神奈川だ」

つまりここは多摩川の川べりというわけだ。

だがそれがどうしたというんだ。俺は無言でゴリラを見つめた。

「このマンションは、今から五年前に完成したが、世界同時不況のあおりを受け、売りだされる直前に開発業者が倒産した。それを会社ごと買い取り、条件を満たす住人のみを対象にした賃貸マ

ンションに改装した。俺は最初からここに管理人として住みこんでいる。お前は、今日から俺を手伝う」

マンションの管理人。俺はぼかんと口を開けた。どういふことだ。殺されたかと思ったら、

マンションの管理人を手伝えときた。

ゴリラは俺のあぜんとした表情も気にせずつづけた。

「お前が覚えなきやならんことはいくつもあるが、まず最初のひとつをいう」

ブラインドが閉じ、多摩川とかかっている橋の夜景をおおい隠した。

「住人のプライバシーを守る。復唱しろ」

それってあたり前じゃねえ？ どのマンションでも住人のプライバシーは大事だろうが。このおっさん、やはりゴリラ並みの知能しかないんだ。

「どうした。いえんのか」

あきれて黙っている俺をゴリラが見つめた。

「いや、なんか、あたり前過ぎて」

なんで俺が、安い賃貸マンションの管理人なんかやらなけりゃいけないんだよ。冗談じゃねえ。すぐ、ばっくれてやる。

そのとき、ブザーが鳴った。俺はびっくりとした。ブザーは、モニター壁の下のパネルにとりつけられた電話から発せられている。

ゴリラが歩みより、受話器を耳にあてた。

「管理室」

いい慣れているのだろう。ちゃんと「かんりしつ」と聞こえた。「わかりました。処理します」

答えて、受話器をおろした。俺を見て、

「仕事だ、こい」
とだけ告げた。

またあの螺旋階段かと思つたが、ちがった。ブラインドでおおわれた窓の向かい側の壁に扉があつて、ゴリラはそれを開いた。

通路がのびている。そこはさつき見おろしたマンションの玄関内部に作られた渡り廊下だった。マンションは二階部までが吹き抜けで、いかにもあとづけの鉄製渡り廊下がロビーの空中をよこぎっているのだ。便利だが、おそらく管理人しか使わないのに、なぜこんなものを作つたんだろう、と俺は渡りながら思った。

渡り廊下の終わりは、マンションの外部とつながつた階段だった。降りると、扉を並べたいくつもの小屋の前にてた。

扉がひとつ開いていた。

「止まれ」

ゴリラが太い腕をうしろにのばして、俺を通せんぼした。

「ここから動くな」

俺は階段を降りきつた場所で立ち止まった。

そこはゴミの集積所だった。開いた小屋の内側から生ゴミの悪臭が漂ってくる。

ゴリラは開いた扉に歩みよつた。ネズミでもでたというのか。確かにネズミ捕りは管理人の仕事だろうけど。

俺はつつ立ったまま、あたりを見回した。

集積所は、マンションと蛇行する川のあいだに設けられていた。川岸の道路との境界には高いフェンスが張られ、照明がこうこうと点っている。侵入者を警戒するように、ここにも監視カメラが何台かおかれていた。

まったく。

どれだけプライバシー保護にうるさい連中ばかりがこのマンションには住んでいるんだ。だってこんな東京の外れの川っぺりじゃなくて、都心の港区とか千代田区の億ションに住めばいいたいして金持でもないのに、プライドばかりが高い奴らか。

そうなら、こんなマンションの管理人なんて最悪だ。理由もないのにあやまるな、といったゴリラの言葉の意味がわかった。きつと何かにつけて文句ばかりつけるような阿呆ぞろいなだろう。

どさつという音に我にかえつた。ゴリラが集積所の中から大きな半透明の袋をもちあげ、外においたのだ。袋の中身は、一メートルくらい細長い何かだった。

ゴリラは作業衣の胸ポケットからカッターをとりだし、ビニール袋を横に裂いた。中身が俺の目にも見えた。

「嘘だろ」

俺はつぶやいた。

人間の腕だった。肩から下で切断された人の片腕が入っていたのだ。その拳は何かを握りしめている。

ゴリラは俺をふりかえり、ふうつとため息を吐いた。
「まったく、規約を守らんで」

そして開けっぴらなしだった集積所の扉を閉めた。扉に貼られているポスターが見えた。そこには太い手書き文字でこう記されていた。

「大田区のゴミ分別規則にしたがいましょう。可燃ゴミ、不燃ゴミ、資源ゴミ、資源プラスチックゴミは、それぞれ色分けされた場所において下さい。また次のゴミの廃棄は禁じます。

死体（含む動物）

爆発物・銃砲類

注射器、化学薬品、麻薬類

これらのゴミ処理をされる場合は、管理室までご連絡下さい」
同じことが英語でも記されている。

「死体（含む動物）」って何だよ。人間の死体をマンションのゴミ集積所に捨てる奴がいるのか。ゴリラは転がっている腕にちょっと触れた。そして首をふった。

「こんなものまでいっしょに捨てて」

「何です」

俺は思わず訊いた。ゴリラが腕をつかんでもちあげた。握られている拳を俺のほうに向けた。俺はあどずさり、階段に足をぶつけてよろめいた。

男の腕だった。浅黒くて毛むくじゃらで、黒っぽい金属製のかたまりを握りこんでいる。

「ちょ、ちょっと……」

「アメリカ製のM67のコピーだな。安全ピンは抜けている」

「な、何ですって」

「手榴弾だ」

ゴリラは、乾電池だともいうような調子でいった。

「しゅ、手榴弾で、あの、戦争とかで使う？」

ゴリラは握りしめられた拳をつついている。

「安全ピンを抜き、レバーが外れると時限信管が作動する。平均四秒で爆発だ。これは安全ピンが抜けているから、この拳がゆるめばレバーが外れる。今は死後硬直しているんで外れない」

「ああ？ 何いつてるんだ。」

「オモチャですよね」

ゴリラは俺を見やった。

「この腕がオモチャに見えるか」

俺は首をふった。

「見えないです」

「なら手榴弾も本物だろう」

「それってヤバくないですか。警察とか自衛隊に連絡しないと」

ゴリラは首をふった。